

February 2020
会員連絡 No.28

The Society of Cardiovascular Endocrinology and Metabolism

日本心血管内分泌代謝学会

- ご挨拶：理事長交代の挨拶/退任理事
- ご案内：第24回日本心血管内分泌代謝学会学術総会
- ご報告：第23回日本心血管内分泌代謝学会学術総会
受賞者紹介 高峰讓吉賞/高峰讓吉研究奨励賞/永井良三賞/若手研究奨励賞
第23回評議員会・総会
- 各種名簿

【第24回日本心血管内分泌代謝学会学術総会】

会長：吉村 道博

事務局

〒105-8461

東京都港区西新橋 3-25-8

東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科

TEL : 03-3433-1111 FAX : 03-5401-0318

学会 URL : <http://www.c-linkage.co.jp/cvmw2020/>

日本心血管内分泌代謝学会
事務局

〒600-8441 京都市下京区新町通四条下る四条町343番地1
タカクラビル6階 一般社団法人日本内分泌学会 内
TEL : 075-354-3562 FAX : 075-354-3561 E-mail : cvem@endo-society.or.jp



目次

理事長交代のご挨拶	2～4
第24回日本心血管内分泌代謝学会学術総会のご挨拶	5～6
理事退任・功労評議員就任のご挨拶	7～9
第23回日本心血管内分泌代謝学会学術総会 開催報告	10～11
第23回日本心血管内分泌代謝学会受賞者プロフィール	
・第23回高峰譲吉賞	12～13
・第23回高峰譲吉研究奨励賞	14～17
・第2回永井良三賞	18～19
・第23回若手研究奨励賞	20～24
名簿	
理事・監事・幹事	25
名誉会員	26
功労評議員	26
評議員	26
2019年度新入会会員	26
第23回日本心血管内分泌代謝学会評議員会・総会議事録	27～31



----- 理事長交代のご挨拶 -----

日本心血管内分泌代謝学会理事長退任のご挨拶

宮崎大学医学部内科学講座循環体液制御学分野

北村和雄

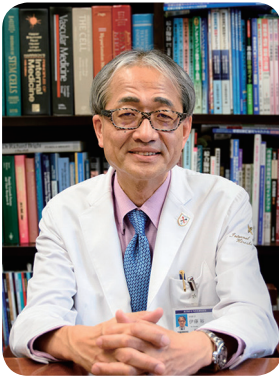
昨年の12月に開催されました第23回日本心血管内分泌代謝学会学術総会をもちまして、日本心血管内分泌代謝学会（CVEM）の理事長を退任いたしました。4年間の任期をなんとか終了することができ、安堵しております。支えていただいた伊藤 裕副理事長はじめ理事の皆様方、評議員・会員の皆様方、そして事務局の皆様方に厚く御礼申し上げます。

私が理事長を拝命した2015年に一回目の心血管代謝週間（CVMW）が行われました。前理事長の斎藤能彦先生のご尽力により、当該年度の循環器関連の4学会学術集会を、CVMWと称し、共同開催できました。その後、第19回～第23回のうち4回がCVMW形式で行われました。もともとCVEMは20世紀後半に我が国で発見・同定されたナトリウム利尿ペプチド、エンドセリン、アドレノメデュリン、グレリン等の循環・代謝調節ホルモンの研究を中心に発展してきた学会です。ただ、循環・代謝調節ホルモン自体を対象にした研究だけでは先細りになりかけており、新たな方向性が求められておりました。そのため、CVMW形式の開催に関連のある他学会の皆様と学問的な交流が得られるようになったことは大きな成果であったと思います。

一方でCVMW形式の開催となったことで、CVEMの独自性を出すことができなくなったとの意見もいただきました。そのような中で、第22回CVEM学術総会は伊藤 裕会長の下、第91回日本内分泌学会学術総会（JES総会）（会長 宮崎大学医学部内科学講座 中里雅光教授）と同時開催されました。CVEM総会をJES総会との初めての合同開催としたことで、CVEMが内分泌学会の分科会というCVEMの原点に立ち返ったことに意味があったと思います。今後は第24～25回CVEM総会はCVMW方式での開催となりますが、CVEMの独自性を出せるような企画も期待したいと思います。

心血管内分泌代謝学の原点はアドレナリンを結晶化した高峰譲吉博士であり、高峰譲吉賞と高峰譲吉研究奨励賞がCVEMの大切な賞として毎年授賞されております。高峰譲吉博士が100年以上も前にアドレナリンやタカジアスターゼを発明・発見し、起業して医薬品として実用化したことは驚嘆に値することです。今後さらに日本心血管内分泌代謝学会を発展させるためには、高峰譲吉博士が行ったように、心血管内分泌代謝学の研究を推進することで、新たな学問分野を切り開いていくことが重要であると思います。そのためには臨床での診断や治療に結びつく可能性のある優れた研究成果を発信し、トランスレーショナルリサーチを推進するとともに、特定の臓器にこだわらずに生体のシステムや病気のメカニズムを深く理解することが大切だと思います。

来年からは、伊藤 裕新理事長のご指導のもと、CVEMがさらに発展することを心より祈念しております。4年間本当に有難うございました。



----- 理事長挨拶 -----

CVEM : Non-Communicable Diseases (NCDs) 医学の王道—その岐路と活路

慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科

伊 藤 裕

この度日本心血管内分泌代謝学会（The Society of Cardiovascular Endocrinology and Metabolism, The CVEM Society）の第8代理事長を拜命いたしました慶應義塾大学医学部腎臓内分泌代謝内科の伊藤 裕です。同時にご就任いただきました東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科、吉村道博副理事長とともに本学会の発展に尽力いたす所存でございます。よろしく願い申しあげます。

1984年の心房性ナトリウム利尿ペプチドの発見を皮切りに、一酸化窒素、エンドセリン、アドレノメデュリンの同定など20世紀末は、まさに心臓血管から分泌されるホルモン発見のゴールドラッシュの時代であり、この分野で日本人研究者は金字塔を打ち立てました。こうした輝かしいレジェンドのもと、CVEMという内分泌学の新しい領域が勃興し1994,1995年の日本内分泌学会学術集会のオフィシャルサテライトシンポジウム Cardiovascular Endocrinology and Metabolism シンポジウムの開催を経て、1996年に日本心血管内分泌代謝学会が設立され、1997年、第1回大会が開かれました。2019年までに、学術集会は、23回の歴史を重ねてまいりました。

内分泌代謝の変調に伴う脳心腎血管疾患、さらには悪性腫瘍の発症進展は、Non-Communicable Diseases; NCDs と呼称され、現在医療の中心課題であります。わたしは、2003年に、肥満を起点としたメタボリックシンドロームの成因、病態、その合併症の総体—その進展の時間経過と臓器間連関を示す概念として、「メタボリックドミノ」を提唱しました。まさに、NCDsは、メタボリックドミノが示す疾患群です。そして、NCDsあるいはメタボリックドミノの全領域をCVEMは包含しています。したがって、CVEMは、まさにNCDs医療の王道であります。

新しいホルモンの研究熱と、新しい医療領域を牽引する期待の中で、CVEMは、設立当時から盛んにその活動を展開してきました。しかしながら、21世紀に入り、会員数の増加はわずかとなり、学術集会に参加する研究者も固定化、高齢化する傾向にあります。新ホルモン発見が稀となったことに加え、臨床研修、専門医制度の変革の中で、若い臨床領域の医学者は、自分の専門とする疾患を扱う学会での活動に汲々とするようになりました。CVEMは、心臓血管ホルモンを主体とし、それら液性因子の病態生理的意義を追求する姿勢を基に成り立ち、特定の疾患をターゲットとしない、領域横断的な学会であります。多くの若手医学者が、CVEMで研鑽する余裕がなくなったことが一因と考えられます。

この学会の状況を打開しようと、2015年の第19回日本心血管内分泌代謝学会学術総会は、試みとして、当該年度の循環器関連の4学会学術集会を、心血管代謝週間（CVMW）と称し、共同開催しました。循環器関連疾患にフォーカスした多くの研究者が参加し、新しい学問的、人的な交流が得られました。一方で、CVEMは日本内分泌学会の分科会の一つであり、6分科会中最大の会員数を誇ります。日本内分泌学会の中での新たな発展も考え、2018年、わたしが会長

を務めた第22回大会では、別の試みとして、通常秋に開催される大会を半年、前倒しし、春に、宮崎大学医学部内科学神経呼吸内分泌代謝学分野の中里雅光教授が会長をされた第91回日本内分泌学会学術総会と合同で開催しました。宮崎での開催にもかかわらず、内分泌学を活動の主体とする会員を中心に、CVEMとしては過去最大の演題が集まりました。このように、CVEMは、いま、あるべき姿を苦しみながら模索しています。

Quo Vadis CVEM?

CVEMの存在意義は果たしてあるのか。あるとすれば、どこへ向かえばいいのか？

この問いは、CVEM会員全員で考えるべき喫緊の課題です。この問いが喫緊なのは、最初に学会ありき、学会ファーストの発想からではなく、現代医学の更なる発展を考えるうえで喫緊なのです。

NCDsを扱うすべての学会の究極の共通目的は、言うまでもなく、病に悩む人たちの救いです。個別の疾患を治療することだけで終わりではないはずで、病に侵された人たちを癒すことこそ目指されるべきです。わたしは、優れた医学は、サイエンス（科学）とクラフト（経験）の上に生み出されるアート（美しい医学）であると考えます。美しさは、鋭いバランス感覚の上に創られます。NCDsに対する美しい医学は、NCDsを構成する自らの専門領域に対する深いサイエンスと豊富な臨床経験とともに、NCDsの総体への理解とコミットメントの姿勢を持たなければ実現しません。ここに、わたしは、CVEM独自の存在意義があると信じています。（もちろん、新しいホルモンを探し求める基礎医学者にとって、NCDs全体に対する理解は、大きな示唆を与えることは言うまでもありません。）

「内分泌至上主義」—ホルモンは、すべての疾患の理解の基本です。その信念の中で、わたしは、CVEMでは、NCDsのアートとしての医学の実現をめざし、疾患別の臨床学会では表立って扱わない医学のアプローチを学会として前面に押し出し、フィーチャーしていくことが望まれると思います。若い医学者が、自分のホームグラウンド（？）と考える各々の臨床学会では得られない知識と感動を与えてくれると思える、斬新で魅力的な学術集会のプログラムを組み立てるべきであると考えます。例えば、ホルモンをメディエーターとした、臓器連関、臓器間のリズム同調や、臓器のリニューアルとそのエラー、老化のメカニズムや、それらを明らかにするための新手法そのものに焦点を当てた企画なども考えられます。

この観点から、中尾一和先生、永井良三先生より、それぞれ、トランスレーショナルリサーチ領域に中尾一和賞、システムバイオロジーの研究領域に永井良三賞を提供していただいたことは、本学会の若手研究者に大きな目標となりました。このような潮流をさらに推し進めるべきです。CVEMの若手医学研究者から、彼らの新感覚で立案した、自分たちが学びたい、あるいは自らコミットしたい、と思える大胆な企画を募っていきたいと考えております。

これまでのCVEMの輝かしい歴史を築いてこられた、多くの先輩先生方のご指導を仰ぎながら、本学会の会員の皆様とともに、ONE TEAMとして、CVEMが新しい医学の在り方を問い、そして開拓する学会として発展するように、粉骨努力する所存でおります。何卒、皆様方のご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。



第 24 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会 開催のご挨拶

会長

東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科

主任教授 吉 村 道 博

この度、第 24 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会を第 28 回日本血管生物医学会学術集会（会長 熊本大学 尾池 雄一 先生）、第 37 回国際心臓研究学会日本部会（会長 神戸大学 平田 健一 先生）、International Society for Applied Cardiovascular Biology (ISACB) 2020（会長 ハーバード医学大学院 相川 眞範 先生）の 4 学会合同で心血管代謝週間（CVMW）2020 として 12 月 11 日（金）、12 日（土）の 2 日間、浜松町コンベンションホールで開催いたします。

CVMW2020 の統一テーマは、'International Joint Conference on Cardiovascular and Metabolic Diseases' です。これまで CVMW は、循環・代謝・内分泌などに関係している国内の学会が幾つか集まって合同開催して大変好評でありましたが、今回はさらに「国内」の枠を破って国際色豊かなものにしたいと思っております。従来通りの日本語での発表もありますが、英語での発表枠も設けて、さらに 4 学会合同の国際シンポジウムを企画して学会を盛り上げていきたいと思っております。

2020 年は東京オリンピック・パラリンピックイヤーです。そういう意味においても国際色を出すことはまさにタイムリーかと思えます。そして CVEM にとりましても海外の先生方に日本に興味深い学会があることをアピールできるチャンスと思っております。

本会が会員の皆様に満足していただける様に関係者一同一丸となって準備をしております。

開催場所は、国内はもとより海外からもアクセスしやすい浜松町です。新しく建った美しいコンベンションホールで皆様にお会いし、有意義なディスカッションができることを楽しみにしております。

2020 年冬、東京でお会いしましょう！

〈開催概要〉

会議名称：第24回日本心血管内分泌代謝学会学術総会（CVMW2020 心血管代謝週間）

会 期：2020年12月11日（金）～12月12日（土）

合同開催：第28回日本血管生物医学会学術集会

会長 尾池 雄一

（熊本大学大学院生命科学研究部 分子遺伝学講座 教授）

第37回国際心臓研究学会日本部会

会長 平田 健一

（神戸大学大学院医学研究科 内科学講座・循環器内科学分野 教授）

International Society for Applied Cardiovascular Biology (ISACB) 2020

会長 相川 眞範

（ハーバード医学大学院 プリガム・アンド・ウィメンズ病院循環器科 准教授）

会 場：浜松町コンベンションホール

〒105-0013 東京都港区浜松町2丁目3-1

ホームページ：<http://www.c-linkage.co.jp/cvmw2020/>

CVMW2020
Cardiovascular and Metabolic Week 2020 心血管代謝週間

2020.12.11 FRI ▶ 12.12 SAT
浜松町コンベンションホール
Hamamatsucho Convention Hall
〒105-0013 東京都港区浜松町2丁目3番1号 日本生命浜松町クアータワー 5F・6F
2 Chome-3 Hamamatsucho, Minato City, Tokyo 105-0013

International Joint Conference on
Cardiovascular and Metabolic Diseases

第28回 日本血管生物医学会学術集会
会長 尾池 雄一
熊本大学大学院生命科学研究部 分子遺伝学講座 教授

第24回 日本心血管内分泌代謝学会学術総会
会長 西村 道博
東京医科歯科大学 内科学講座 循環器内科学分野 教授

第37回 国際心臓研究学会日本部会
会長 平田 健一
神戸大学大学院医学研究科 内科学講座・循環器内科学分野 教授

International Society for Applied Cardiovascular Biology (ISACB) 2020
会長 相川 眞範
ハーバード医学大学院 プリガム・アンド・ウィメンズ病院循環器科 准教授

協賛企業 株式会社コンベンションリンクエッジ 〒105-0013 東京都港区浜松町2丁目3番1号
TEL: 03-3263-2359 FAX: 03-3263-8893 E-mail: cvmw2020@c-linkage.co.jp

Co-sponsor Secretariat of Cardiovascular and Metabolic Week 2020 (Cm) Convention Linkage, Inc.
2 Sanbancho, Chiyoda-ku, Tokyo 105-0075, Japan
TEL: +81-3-3263-2359 FAX: +81-3-3263-8897 E-mail: cvmw2020@c-linkage.co.jp

<http://www.c-linkage.co.jp/cvmw2020/>

伊藤 貞嘉 先生（公立刈田総合病院）



略歴

1979年	東北大学医学部卒業
1981年	東北大学医学部第二内科大学院研究生
1982年	ヘンリーフォード病院 Research Fellow
1987年	ヘンリーフォード病院 Senior Staff
1995年	東北大学医学部第二内科講師
1997年	東北大学教授（第二内科、腎高血圧内分泌学）
2012-2018年	国立大学法人東北大学 理事（研究担当）
2019年	東北大学名誉教授、公立刈田総合病院特別管理者

—— ご挨拶 ——

この度は、65歳となり東北大学を定年退職、本学会の理事も任期満了となり、退任させていただくことになりました。本学会の創立以来、約20年にわたり多くのことを学ばせていただき、心より感謝いたしております。

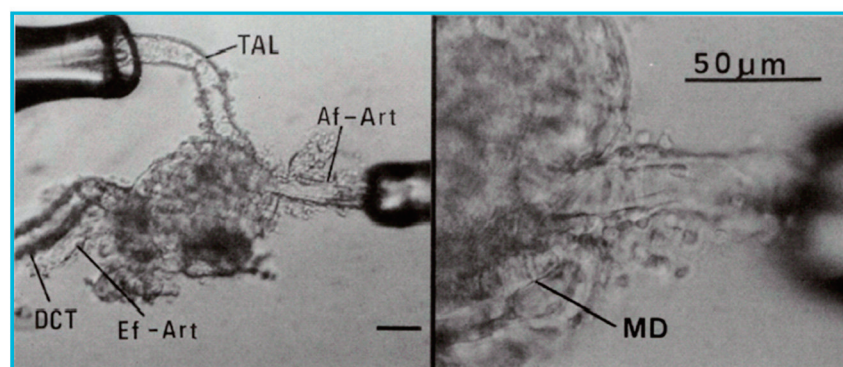
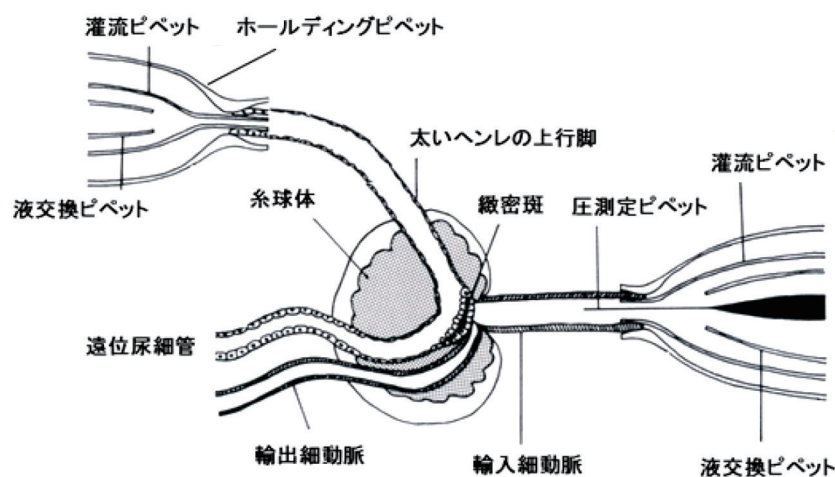
私は初期研修のあと、東北大学医学部第二内科（吉永馨教授）に入局し、当時筆頭講師の阿部圭志先生に師事しました。入局3か月後に、阿部先生から「伊藤君には、来年からデトロイトにあるヘンリーフォード病院のオスカー・カルテロのところに行ってもらおう。ついては何でもいいから英語の原書論文を作成しなさい。ただし、1年目のデューティーはすべてこなしなさい。」と言われました。翌年から2年間半ヘンリーフォード病院の研究フェローとして、緻密斑がレニン分泌に関与するかどうかを証明する研究に明け暮れました。輸入細動脈単独と、輸入細動脈に緻密斑が付着した標本をマイクロディセクションで取り出し、それらからレニン分泌を比較検討するものでありました。多くの困難を伴いましたが、幸い多くの方々のおかげにより、研究生活を続け、何とか緻密斑機序を証明できました。特に、中学時代の国語の恩師中野松子先生は「貞嘉君、あなたたちが大変な状況でがんばっていることをお父さんから聞きました。私、これから毎日手紙を書くから、頑張ってください」と初めの手紙を受け取った後、本当に毎日手紙が届き「日本のことや故郷のこと」を伝えていただきました。本当にありがたく、励ましていただきました。

第二内科に帰局して、1年ほどたった後、オスカーから「ヘンリーフォード病院にスタッフとして戻ってきて欲しい。研究費もポジションも用意した」と何度も、しかもいつも真夜中に電話がありました。そこで、緻密斑を微小灌流して灌流液のNaCl濃度を変化させた時のレニン分泌の変化を検討し、1年半で帰国の予定で再渡米しました。しかし、再渡米3か月後にこの研究はミシガン大学の研究者に先行されサイエンス誌に報告されました。大変がっかりしましたが、皆に励まされ、今度は「緻密斑と輸入細動脈を同時に微小灌流」することにより、尿細管糸球体フィードバック機構を証明するプロジェクトに取り組みました。器具から、輸入細動脈の灌流、輸入細動脈内の圧力を測定する方法などを全て自ら開発する必要性がありました。多くの偶然と多くの助けを得て、再渡米1年半後にこの実験に成功することができました。その後、NIHのROI GrantやプログラムプロジェクトGrant等も獲得し、研究室も大きくなり、結局2回目は8年間米国に滞在することになりました。

1995年、恩師阿部圭志先生の「帰って来い」の一言で、講師として東北大学に戻り、1997年に教授に就任しました。教授就任後阿部先生に「なぜ入局したての僕をアメリカに行かせることにしたのですか?」と尋ねましたところ、「①若いうちに、そして、自分の手垢をつける前に世界を見せることが大切だ、それに、②伊藤君は何を言っても断らない」とのお答えでした。私にとって、海外での生活は研究成果以上に、世界の一流と接し、その考え方や人生観などに直接触れることができる良い機会、また、文化の違いや社会常識の違いを肌で感じることもできる良い機会でありました。一方、研究は真剣勝負の戦いで、それは熾烈そのものでした。そのような環境に身をおくことも、良い経験になり、これもまた尊敬できる仲間づくりに役立ちました。

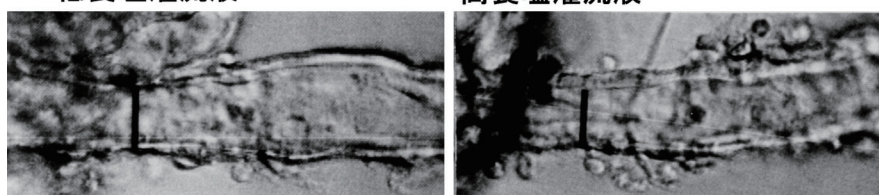
教授就任以降は臨床研究にも力を入れて、良陵CKD研究を立ち上げ、また、糖尿病性腎症に対する国際共同二重盲検無作為比較試験等を実施し、臨床的エビデンスの創出にも貢献できました。さらに、大学退職直前6年間は大学全体の研究担当理事を務め、ベンチャー育成会社の設立、東北放射光の設立など医学とはほとんど関係ない事業も経験しました。この40年にわたる研究生活を振り返ってみると、いくつもの難問にチャレンジしてきた感じがありますが、いつも助けてくれる人が現れてくれました。これも、柔軟性に富む若い時から、世界を見させていただき、多くの方と信頼関係を築くことができたからだと感謝しています。

最後になりますが、本学会のますますのご発展を祈念いたします。誠にありがとうございました。



低食塩灌流液

高食塩灌流液



輸入細動脈・緻密斑同時灌流のシェーマ (上) と実例 (中)、緻密斑灌流液 NaCl 濃度の上昇による輸入細動脈の収縮反応 (下)

南野 直人 先生 (国立研究開発法人 国立循環器病研究センター
創薬オミックス解析センター)



略歴

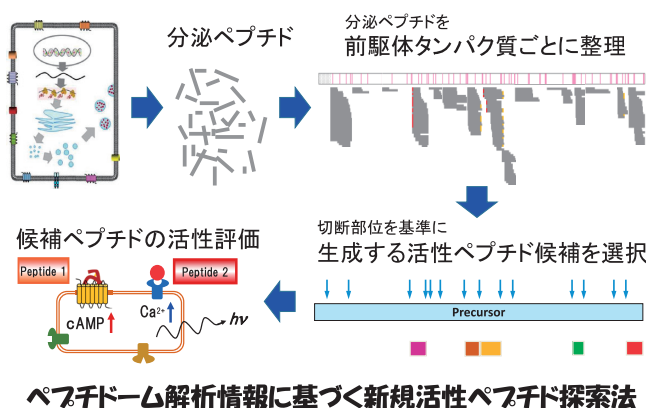
- | | |
|-------|----------------------------|
| 1976年 | 大阪大学理学部化学科 卒業 (1983年 理学博士) |
| 1981年 | 宮崎医科大学医学部助手 |
| 1985年 | 米国 Tulane 大学医学部留学 (有村章教授) |
| 1988年 | 国立循環器病センター研究所薬理部 室長 |
| 2002年 | 国立循環器病センター研究所薬理部 部長 |
| 2015年 | 国立循環器病研究センター創薬オミックス解析センター長 |
| 2019年 | 同 創薬オミックス解析センター 特任部長 |

—— ご挨拶 ——

2019年の第23回学術総会で定年となり、理事を退任いたしました。1996年の発足以来、ほとんどの学術総会に参加させて頂きました。私など医学部以外の出身者も幅広く受け入れ、分子レベルで議論できる学会で、本当に多くのことを学ばせて頂きました。心より感謝申し上げます。2013年には第17回の学術総会会長を務めさせて頂き、150を超える一般演題など、皆様のご協力を得て成功裏に開催できましたことに、改めて御礼申し上げます。

私は大学4年の時に阪大蛋白質研究所に配属され、指導を頂いたのが松尾壽之先生でした。1978年に松尾先生は宮崎医科大学に赴任されたので、私も大学院を中退して宮崎に参りました。「自分達の持つ化学的知識で医学研究に貢献するため、隘路となっている物質発見をテーマとする」という松尾先生の考えに従い、ペプチド探索を開始しました。先輩の寒川賢治先生の指導の下、分解抑制した抽出法、HPLCによる高度分離法、平滑筋運動を指標とするアッセイ法、微量構造解析法などを組み合わせ、脳や脊髄よりオピオイドペプチドやニューロメジンを発見できました。米国有村章先生の研究室ではPACAP発見の基盤を作り、帰国後はBNPとCNPを須藤哲司博士と発見しました。その後、質量分析技術の進歩により、組織や細胞の産生・分泌するペプチド総体(ペプチドーム)が解析可能となると考え、ペプチドーム解析情報を用いて新規ペプチドの探索を開始しました。受容体まで同定できた真の生理活性ペプチドはまだありませんが、少なくとも調節因子として機能するNERP類などを見出しています。解析技術が向上すれば、オミックス解析情報よりペプチドを探索する時代が来るかもしれません。ペプチド探索研究の経過のみを記しましたが、新規ペプチドに基づく情報伝達系の発見と機能解明を主目標としており、分子と機能、疾患との関係を学ぶために、本学会は極めて有意義でした。多分野の研究者が自由に参加、討論できるのが本学会の特長であり、今後もこの伝統を守って頂きたいと考えております。

本学会の益々の発展を祈念いたします。今後もお役に立てることがあれば、遠慮なくお声掛け下さい。



CVMW2019 —Global Science から Precision Medicine へ— を終えて

第 23 回 日本心血管内分泌代謝学会学術総会

会 長 柏 原 直 樹

会長付幹事 佐 藤 稔

この度、第 23 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会を、第 27 回日本血管生物医学会学術集会（会長 佐賀大学 野出 孝一先生）、第 36 回国際心臓研究学会日本部会（会長 国立循環器病研究センター 北風政史先生）と合同で、心血管代謝週間（CVMW）として 12 月 14 日（土）、15 日（日）の 2 日間、神戸国際会議場で共同開催することができました。各大会長の先生方および関係者一同、鋭意準備をさせていただき、参加者総数 496 名と盛況のうちに無事終えることができました。CVEM の一般演題として 90 題（YIA 口演 11 題、一般口演 15 題、ポスター 64 題）が発表され、そのうち 11 演題が YIA 候補として選ばれ、内容の充実したセッションとなりました。Figure 2 は、厳格な審査の結果、YIA に選ばれた先生方です。

永井良三賞には東京大学循環器内科 野村征太郎先生が受賞されております（Figure 3）。single cell sequence を駆使した心不全研究を展開されており、本賞にふさわしい素晴らしいご研究内容でした。



Figure 3
永井良三賞受賞者。左より CVEM2019 会長 柏原直樹先生、永井良三賞 野村征太郎先生、永井良三先生。



Figure 1
第 23 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会（CVEM2019）ポスター。



Figure 2
若手研究奨励賞（YIA）受賞者。左より森内健史先生、森健太郎先生、戴昆先生、CVEM2019 会長 柏原直樹先生、藤原隆行先生、候聡志先生。

今回は 3 学会共通のテーマとして「Global Science から Precision Medicine へ」を掲げ、3 学会合同の特別講演及びシンポジウム、本学会独自のプログラムを開催いたしました。特別講演には「酸化ストレス応答の分子メカニズムの

病態」として東北大学医学系研究科 医化学分野 山本雅之先生にご講演いただきました。抗酸化遺伝子発現を制御する Nrf2-Keap1 システムを中心に講演いただきました。また3学会合同シンポジウムとして「メタボリック研究の最前線」と「ゲノム、エピゲノムと循環・代謝医学」のセッションを行い多くの参加者を得ることができました。

さらに今後のCVEM研究の展望を得るために「CVEM ミレニアム」と称して東京大学医学部腎臓・内分泌内科 長谷川頌先生と慶應義塾大学腎臓内分泌代謝内科 木内謙一郎先生にご講演いただき、最後には公立刈田総合病院 伊藤貞嘉先生に総括していただきました。

これら多彩な演題を通してご参加いただきました多くの研究者にとって心血管内分泌代謝疾患の最先端の研究について多角的な視点での知見を深め、次世代の研究を模索する絶好の場となったのではないかと自負しております。

また、柏原直樹大会長は荣誉ある高峰譲吉賞を受賞し、高峰譲吉奨励賞を受賞された香川大学薬理学 中野大介先生、熊本大学大学院生命科学研究部 榎原孝成先生とともに受賞講演を行ないました。

今回のCVEMは4回目の関連学会合同開催となり、昨年同様、盛会裏に終えることができました。

来年度のCVEM学術総会は東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科 吉村道博教授を会長として2020年12月11日(金)～12日(土)に浜松町コンベンションホールにおいて開催されます。第28回日本血管生物医学学会学術集会(会長 熊本大学 尾池雄一先生)、第24回日本心血管内分泌代謝学会学術総会(会長 東京慈恵会医科大学 吉村道博先生)、第37回国際心臓研究学会日本部会(会長 神戸大学 平田健一先生)、International Society for Applied Cardiovascular Biology (ISACB) 2020(会長 ハーバード医学大学院 相川真範先生)との共同開催でCVMWとして開催予定になっており、共通テーマは「International Joint Conference on Cardiovascular and Metabolic Diseases」となっております。最後になりましたが、関係各位の皆様には多大なるご尽力をいただきまして誠にありがとうございました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

文責 川崎医科大学 腎臓・高血圧内科学 長洲 一

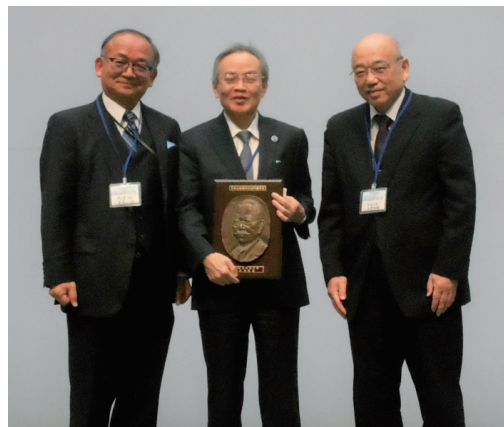


Figure 4
高峰譲吉賞受賞者。左より中尾一和先生、高峰譲吉賞 柏原直樹先生、理事長 北村和雄先生。



Figure 5
高峰譲吉研究奨励賞受賞者。左より中尾一和先生、高峰譲吉研究奨励賞 榎原孝成先生、理事長 北村和雄先生。



Figure 6
高峰譲吉研究奨励賞受賞者。左より中尾一和先生、高峰譲吉研究奨励賞 中野大介先生、理事長 北村和雄先生。

第23回日本心血管内分泌代謝学会受賞者 プロフィール

第23回日本心血管内分泌代謝学会研究賞を受賞されました先生方のプロフィールを掲載いたします。

----- 高峰譲吉賞受賞者 -----

柏原 直樹 先生 (川崎医科大学 腎臓・高血圧内科学)

受賞対象となった研究

「慢性腎臓病・加齢腎の基盤病態と心血管病との関連機序の解明」



略歴

1982年	岡山大学医学部 卒業
1987年	Northwestern 大学
1996年	岡山大学医学部第三内科講師
1997年	岡山大学医学部第三内科助教授
1998年	川崎医科大学 腎臓・高血圧内科学教授
2009年	Oxford 大学
2010年	川崎医科大学副学長、日本腎臓学会理事長、高血圧学会副理事長、NPO 法人日本腎臓病協会理事長

—— 受賞によせて ——

栄誉ある高峰譲吉賞を授与いただき、関係各位に深甚なる謝意を表したく存じます。本賞は「心血管内分泌代謝学の分野において卓越した業績を有する指導的研究者」に授与されるものであり、受賞者にはそうそうたる碩学が名前を連ねています。高峰譲吉氏がアドレナリンの発見者であり、同時に医薬品開発、製薬企業の創業、日本の産業振興にも大きく貢献されたことに思いを至らせると、自身の受賞に忸怩たる思いを払拭することができません。ともあれ、受賞を契機にこの分野の学術研究の進展に幾ばくかでも貢献したいという思いを強くいたしております。

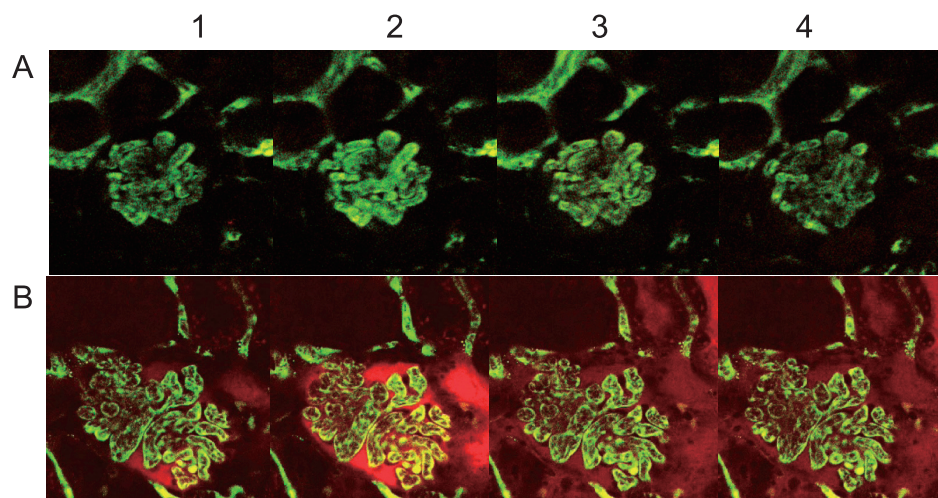
腎臓は内分泌臓器であり、また軽度の腎機能低下やアルブミン尿が脳心血管病と強く関連することが示されています。国民の健康寿命を毀損する重大な病態であることが判明し、慢性腎臓病CKD概念が確立されました。その意味では心血管内分泌代謝学会が対象とする疾患群に包含されうるものと見なされます。

腎臓は血管臓器であるという認識に基づき、CKD発症・進展、合併症発症、加齢腎の共通病態基盤にECDが関与していると考え研究を進めてきました。

研究技術上の隘路であった腎内微小血管の血行動態・透過性変化、内皮機能変化を生体動物で解析しうる新規in vivo imaging技術を確立し、解明に取り組みました。各種の遺伝子改変動物を活用して、CKD・加齢腎の基盤病態としてのECDの分子機序、病態形成上に果たす役割、内分泌系液性因子、特にレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の関与を解明してきました。Reactive oxygen species (ROS) とNOの不均衡、eNOS機能異常(uncoupling)が慢性

腎臓病、加齢腎に共通する病態であり、転写因子 Nrf2/Keap1 経路が防御機転として機能していることを明らかにいたしました。また加齢腎組織におけるミトコンドリア及びミトコンドリア DNA の酸化的障害が関与し、Klotho/FGF23 経路の加齢腎における役割を解明しました。また腎線維化促進機序としての Wnt- β catenin 経路の関与と内皮機能障害との関連についても明らかにいたしました。

この受賞を機に、腎臓病の克服を目標に腎臓病の病態解明を深化させ、有効な治療法開発に一層、尽力したいと願っております。



多光子レーザー顕微鏡を用いた in vivo imaging 法による蛋白尿の可視化
上段 (A) は正常マウス糸球体、下段 (B) は糖尿病モデルマウス

受賞者-1

榑原 孝成 先生 (熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学)

受賞対象となった研究

「腎臓病進展に果たす自然炎症の病態生理学的意義の解明」



略歴

1999年	三重大学医学部医学科卒業
2009年	京都大学大学院医学研究科博士課程修了
2013年	京都大学附属病院腎臓内科助教
2014年	熊本大学大学院生命科学研究部腎臓内科学助教
2017年	熊本大学大学院生命科学研究部腎臓内科学講師

—— 受賞によせて ——

この度は高峰讓吉研究奨励賞を賜り、誠にありがとうございます。本賞は尊敬する大変御高名な諸先生が受賞されてこられた誉れ高い賞であり、身に余る光栄に存じます。日本心血管内分泌代謝学会の先生方、これまでご指導を賜りました諸先生方に心より御礼申し上げます。

私は大学卒業後、当時井村裕夫先生が院長を務めておられた神戸市立中央市民病院で2年間の初期研修の後、出身大学である三重大学そして山田赤十字病院（現 伊勢赤十字病院）で循環器・腎臓内科医として研鑽を積みさせていただきました。卒後計6年間で経験した心腎両疾患患者さんの診療では充実感を得ると同時に、心臓・腎臓両者がお互いに不可欠であることを実感、心腎連関の病態、特に守りの要である腎臓の役割を理解することの重要性を強く感じて研究の場に身を置きたいと思ったことが先日のことのように思い出されます。このような臨床医としての背景に加え、初期研修のご縁もあり、京都大学大学院内分泌代謝内科 腎臓グループの門を叩かせていただきました。

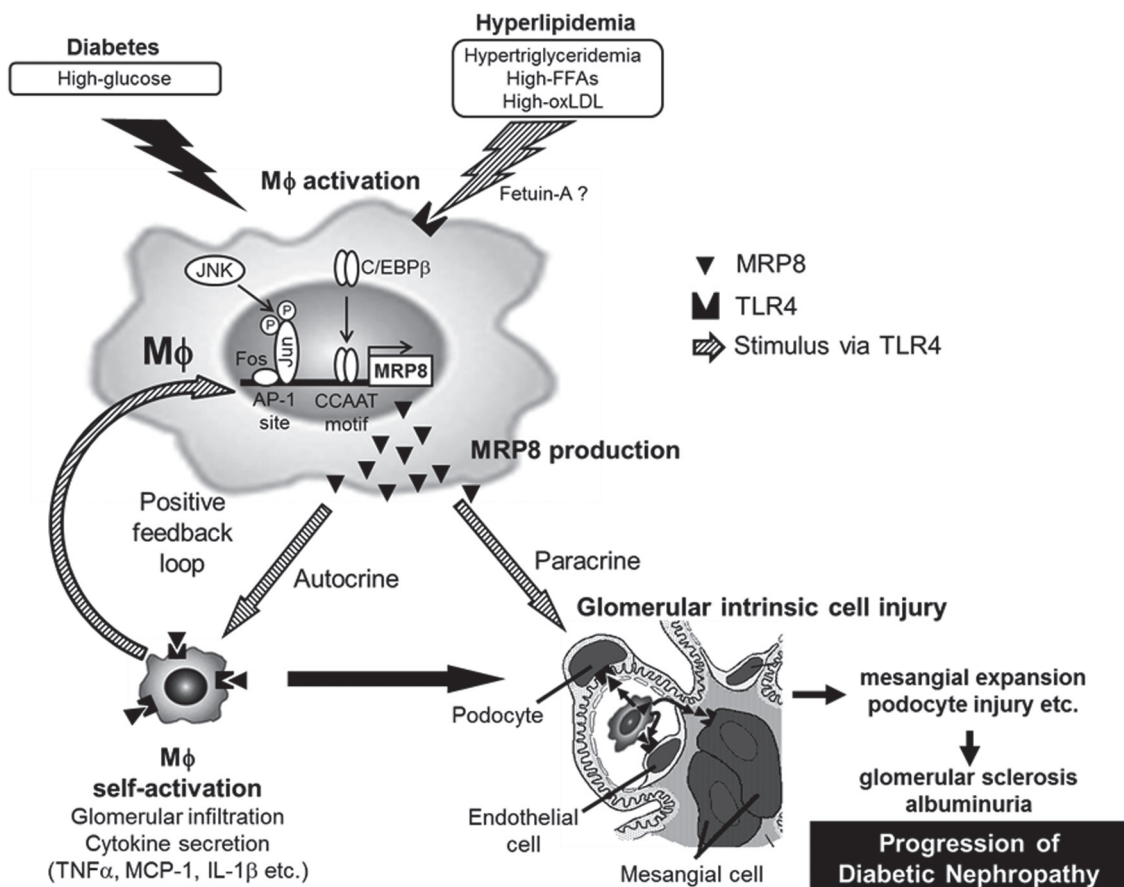
大学院入学後は心腎連関や透析などを含む種々の病態で最大の原因疾患である糖尿病性腎症の病態理解をテーマに頂き研究を行ってまいりました。糖尿病性腎症、中でも予後に直結する尿蛋白の進展には糸球体病変が不可欠であり、糸球体病変に重要な機序のスクリーニングを行った結果、着目することになったのが自然炎症（慢性炎症）でした。糖尿病状態では高糖濃度と脂質刺激がMφに対してTLR4を介して相乗的に炎症メディエーターMRP8の発現を誘導、腎症進展に重要な役割を果たすことを明らかにしました。この機序は腎臓に留まらず、大血管をはじめとする多臓器合併症の進展に重要な可能性も確認しました。このMφを介した糖脂肪毒性による腎症進展には、平時はウィルス感染防御に働く機序が重要な可能性が示唆されました。さらに糖尿病性腎症の慢性炎症には糖脂肪毒性による全身性の影響に加え、腎糸球体局所での細胞連関が重要な可能性が明らかになりつつあります。既存薬スクリーニングにて糸球体局所での慢性炎症をターゲットとした薬物が効果的に糖尿病性腎症を抑制できる可能性があり、drug repositioning

による今後の応用が期待されます。近年の単細胞解析技術の進歩は目覚ましいものがあり、これまで想定内外のことが次第に明らかとなってきました。私共の最近の検討により、糸球体内細胞連関が正常な小胞体ストレス応答を障害することで、糸球体病変そして蛋白尿進展に重要である糸球体上皮細胞障害を悪化させることを明らかにすることができました。

近年、循環器・腎臓領域においてブレイクスルーをもたらす大規模臨床試験の報告が相次いでおり、液性分泌因子そして臓器・構造・細胞各レベルでの連関の重要性を再認識させるものがあります。これらは心血管内分泌そのものであり、各分野横断的に交流し、知識を共有できる場として本学会の役割は大きく、今後も益々重要になると思われます。

今回の受賞は、これを糧として更に精進すべく叱咤激励いただいたものであります。本学会そして若手のために微力ながら尽力いたしますので、今後とも御指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

糖脂肪毒性によるMφを介した糖尿病性腎症進展のメカニズム

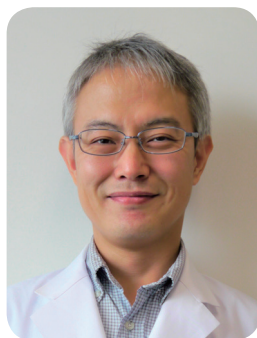


受賞者-2

中野 大介 先生 (香川大学医学部薬理学)

受賞対象となった研究

「生体イメージング4次元解析による生体応答の理解」



略歴

2001年	大阪薬科大学薬学部卒業
2006年	大阪薬科大学大学院博士課程修了
2006年	ジョージア医科大学ポスドク
2008年	香川大学医学部助教
2010年	南カリフォルニア大学客員研究員
2018年	香川大学医学部准教授

—— 受賞によせて ——

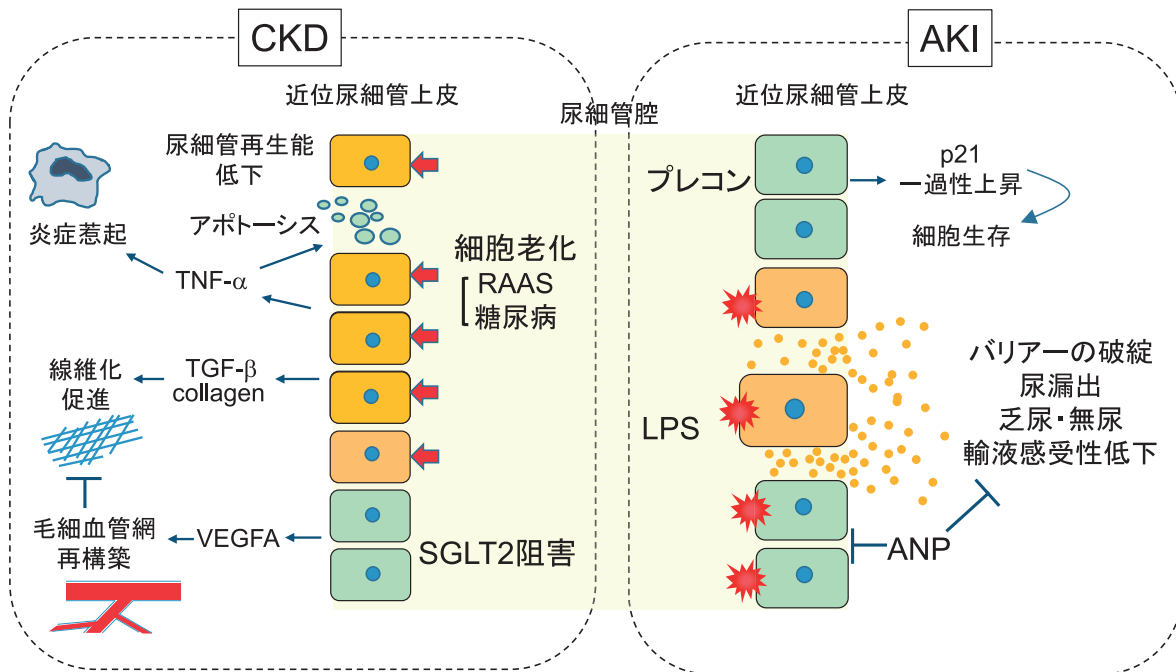
この度、第23回高峰讓吉研究奨励賞受賞の誉に与り、大変名誉に感じております。私が心血管内分泌代謝学会に入会したのは、留学から帰国したばかりの2008年です。留学先のGeorgia医科大学David Pollock研究室にて行ったエンドセリン1の腎髄質内生理作用に関する発表をさせていただきました。他の方の研究レベルの高さに驚いたことを記憶しています。そのような学会で、賞を頂くことが出来、私をここまで導いて戴いた全ての先生方、特に、香川大学薬理学の西山成教授、研究初期の一番決定的な時期を指導していただきました大阪薬科大学薬理学講座の松村靖夫教授と故高岡昌徳教授に深謝いたします。

腎臓は水・電解質の維持・排泄に極めて重要な貢献をする臓器であり、かつ多くの薬物の排泄臓器でもあります。しかし、腎実質が障害を受け腎不全に陥っても、有効な薬物療法は非常に限られており、新たな研究アプローチ、治療戦略の構築が求められています。近年我々は生体イメージング法を用いて、腎病態生理機能の変化を解析しています。多光子レーザー顕微鏡による生体イメージングは、多様な生命現象を細胞レベルの解像度で可視化できるという点で非常に有用であり、アンジオテンシノーゲンや(プロ)レニンの糸球体ろ過バリアーにおける透過性やANPの急性腎障害に対する効果を明らかにすることが出来ました。特に、ANPは心臓由来のものと薬物として投与されたものが、それぞれ血管内皮細胞と腎近位尿細管に作用し、急性腎障害における乏尿・無尿に対して保護的に働いていることを見出しました。これは臨床における乏尿性急性腎障害に対する効果を説明できるものであり、実験動物を用いた基礎研究ではありますが、1つの大きな成果を出せたと感じております。また共同研究にて、腎障害下でのエリスロポエチン産生細胞の挙動、ミトコンドリア膜電位の変化が明らかとなりました。特に、生理的には毛細血管外周に突起を伸ばしてペリサイト様形態をしているエリスロポエチン産生細胞が、腎障害と共に毛細血管外周から剥離していく様は、この領域に大きなインパクトを与えることが出来たと自負しております。現在、腎内分泌物質としてのエリスロポエチンはprolyl hydroxylase

阻害薬の薬理作用にも深く関与していることから、更なる研究を進めております。下図に僭越ながら私が今まで主導してきた近位尿細管障害に関する成果をまとめております。慢性腎臓病（CKD）におけるレニン・アンジオテンシン系や糖尿病による細胞老化、SGLT2阻害薬による保護作用の効果、急性腎障害（AKI）における preconditioning（プレコン）の機序や乏尿の機序など、まとまりのない仕事ではありますが、近年の病態の複雑さを鑑み、いつか統合的に考えられないかと続けております。

多光子レーザー顕微鏡による解析は、依然として生体内で実際に起きていることを観察する一つのツールとして、強い力を持っています。今後も、更なる方法論としての拡がりにチャレンジするとともに、病態解明・治療法開発に向け一層の精進をし、学会の発展にも寄与していく所存です。

近位尿細管における障害進展メカニズム、予防・治療戦略に関する研究成果



野村 征太郎 先生（東京大学医学部附属病院 循環器内科）

受賞対象となった研究

「シングルセルシステム循環器学による循環器システム構造の全貌解明」



略歴

2005年	千葉大学医学部医学科卒業
2005年	聖路加国際病院内科レジデント
2009年	千葉大学大学院医学研究院 循環器内科 大学院博士課程 (小室一成教授研究室)
2010年	東京大学先端科学技術研究センター ゲノムサイエンス分野 協力研究員
2013年	千葉大学大学院医学系研究科 循環器内科 博士課程 修了 (博士取得)
2013年	東京大学大学院医学系研究科 循環器内科 特任研究員
2016年	東京大学大学院医学系研究科 循環器内科 重症心不全治療開発講座 特任助教、システム循環器学研究室グループリーダー

—— 受賞によせて ——

この度は荣誉ある賞をいただき、誠に光栄に存じます。ここで私どもの取り組みをご紹介しますとともに、今後の将来展望を述べたいと思います。

循環器疾患を含めたあらゆる疾患は、臓器・細胞・分子・遺伝子、各レベルの要素が有機的に繋がった個体システムの破綻により生じます。遺伝要因と環境要因の組み合わせが疾患発症に直結するため、その要因に着目して疾患システム構造の全貌を解明することが、分子病態の解明、精密医療の展開に欠かせません。私は2015年より東京大学医学部附属病院 循環器内科にてシステム循環器学グループを主催し、循環器疾患の終末像である心不全のシステム構造の全貌解明を目指しています。

(1) 心筋症・心不全におけるゲノム構造基盤の解明 (Nomura et al. *Sci Rep.* 2018)

拡張型心筋症は重症心不全の主要な要因であり、わが国の心臓移植原因疾患の第一位です。我々は包括的遺伝子解析を行い、拡張型心筋症において *TTN* 遺伝子の短縮型変異と *LMNA* 遺伝子の変異が大半を占めること、*TTN* 短縮型変異患者は心機能が回復して予後が良い一方で、*LMNA* 変異患者は心機能の回復は難しく予後が極めて悪いことを明らかにしました。これにより *LMNA* 変異の同定は、心筋症診療において推奨クラス I となりました (2019年3月改訂の心筋症診療ガイドライン)。

(2) 心不全における心筋リモデリングの分子挙動 (Nomura et al. *Nat Commun.* 2018)

我々は、心筋シングルセル RNA-seq 解析を世界で初めて成功させて圧負荷心不全モデル・心不全患者の心筋組織検体に適用し、圧負荷による ERK1/2・NRF1/2 シグナル活性化がミトコンドリア生合成・細胞肥大を誘導すること、持続的な圧負荷により代償型と不全型の2つの心筋細

胞に分岐すること、不全型心筋への形質転換には DNA 損傷・p53 シグナルの活性化が重要であることを解明しました。

(3) 心臓ストレス応答の空間的不均一性の同定 (Nomura et al. *J Mol Cell Cardiol.* 2019)

我々は、1分子 RNA *in situ* hybridization を世界で初めて心臓に応用してシングルセル RNA-seq と統合解析し、ストレス応答として胎児化する心筋細胞は形態的に小さく、ミトコンドリア代謝が未熟であり、心臓の中間層で特異的に出現することを解明しました。これは中間層を占める輪状筋の特異性によるものと考えられ、ストレス応答の空間的不均一性の概念を世界に先駆けて提唱しました。

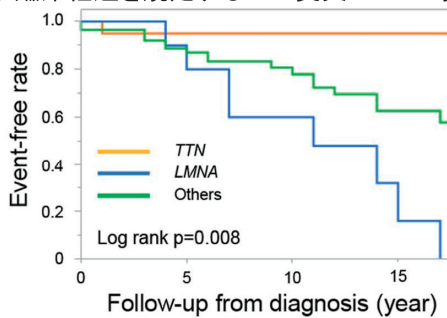
(4) 心筋 DNA 損傷による心不全の予後・治療応答予測 (Nomura et al. *JACC BTS* 2019)

これまでの研究により、心筋 DNA 損傷が心不全の不可逆性を規定していると考えられたため、心不全患者の治療前の心筋 DNA 損傷定量解析を行ったところ、薬物応答不良群で有意に DNA 損傷陽性率が高く、DNA 損傷率 5.74% を閾値として DNA 損傷群と非損傷群とを分割すると、感度 77.8%・特異度 87.1% で患者の薬物応答性を予測できることを明らかにしました (特許出願済み)。

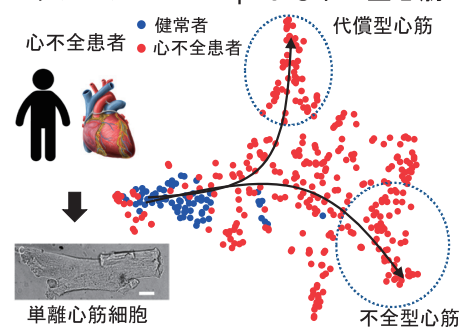
(5) 将来展望

これらの研究により、遺伝要因と環境要因はいずれも最終的に心筋細胞に DNA 損傷を誘導して不全心筋化に繋がることを明らかにしました。しかしながら、心筋 DNA 損傷がいかに誘導されるか? DNA 損傷がいかに不全心筋化・心不全病態を誘導するか? 心筋 DNA 損傷は治療標的となるか? という大きな問題を解くことが次なる課題です。この課題の克服に向けてさらに研究を進め、循環器学の発展に貢献したいと思います。

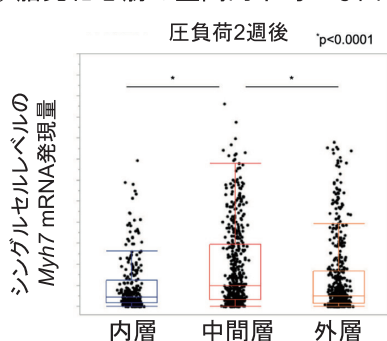
① 臨床経過を規定する TTN 変異と LMNA 変異



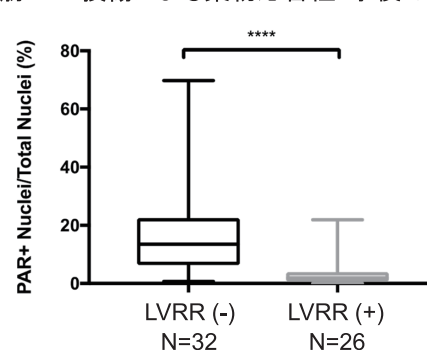
② シングルセルRNA-seqによる不全型心筋の同定



③ 胎児化心筋の空間的不均一な出現



④ 心筋DNA損傷による薬物応答性・予後の予測



受賞者-1

候 聡志 先生 (東京大学医学部附属病院循環器内科,
東京大学大学院医学系研究科重症心不全治療開発講座)

受賞演題

「一細胞 RNA-seq/細胞間相互作用解析による不全心筋誘導を制御する
非心筋細胞の機能解明」



略歴

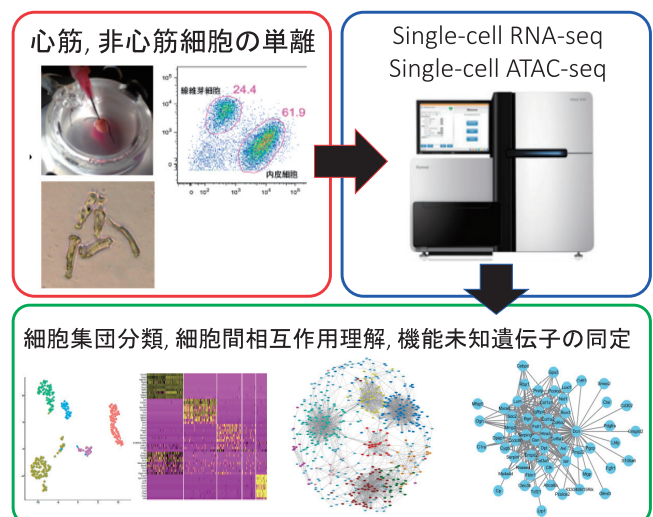
- 2010年3月 東京大学医学部医学科卒業
- 2010年4月 聖路加国際病院 内科系初期研修医
- 2012年4月 榊原記念病院 循環器内科専門研修医
- 2014年4月 東京大学大学院医学系研究科 博士課程入学
- 2017年4月~2019年3月 日本学術振興会特別研究員
- 2018年3月 東京大学大学院医学系研究科 博士課程修了
- 2019年4月 東京大学大学院医学系研究科重症心不全治療開発講座 特任研究員

— 研究内容および抱負 —

この度は第23回日本心血管内分泌代謝学会学術総会にて若手研究奨励賞を受賞させていただき、大変嬉しく思います。

私は平成27年より東京大学医学部附属病院循環器内科 小室一成先生のご指導の下、基礎研究に携わり始めました。当時はまだ黎明期であったシングルセル RNA-seq 解析の技術を学び、それを in vivo の心臓組織の解析に適用すべく、解析に適した心筋細胞や非心筋細胞の単離方法をまず確立するところから始めました。幸い多くの先生方のご指導のおかげで有効な組織のサンプリング方法や細胞単離方法を確立することができ、現在ではマウスのみならず、ヒト検体においてもシングルセル RNA-seq 解析を行うだけでなく、さらにシングルセル ATAC-seq といったトランスクリプトーム以外の解析も徐々にできるようになりました。現在、圧負荷心不全や虚血性心不全など、様々な心臓の病態についてシングルセル解析を応用させるべく研究を重ねております。シングルセル解析の利点は疾患病態を包括的かつ詳細に理解できるので、病態の理解が深まる他、新たに重要な因子を見つげられる可能性も高まります。これまではシングルセル RNA-seq 解析を通じて、心不全患者さんの治療予後層別化に有用な指標を見出したり、また心臓の恒常性維持や心不全病態形成に重要な機能未知な遺伝子を同定したりと研究を進めて来ました。将来的にはよりハイスループットな解析や臨床に結びつくような研究を目指し、現在 CRISPR/Cas9 技術やゲノム解析研究との融合にも積極的に取り組んでおります。

若輩者ではございますが、若手研究奨励賞に恥じないよう精一杯努力を重ねて参りますので、引き続きご指導並びにご支援の程何卒よろしくお願い申し上げます。



受賞者-2

戴 昆 先生 (信州大学医学部医学科 循環病態学教室)

受賞演題

「アドレノメデュリン-RAMP3系欠損は、癌関連線維芽細胞 (CAF) の活性を抑制し、癌転移を抑制する」

略歴



2013年 天津医科大学附属腫瘍病院乳腺病理教室
腫瘍学 修士課程 入学
2016年 信州大学大学院医学系研究科循環病態学教室
博士課程 入学

— 研究内容および抱負 —

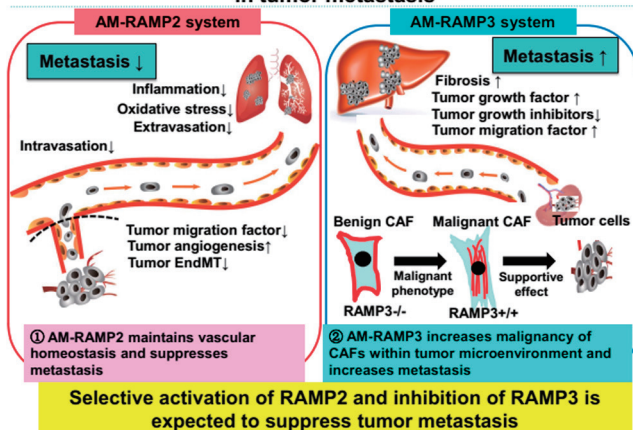
この度は、第23回日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞に選出頂き、誠にありがとうございます。学会長の柏原直樹先生、選考委員の先生方、ならびに関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

私たちの研究室では、アドレノメデュリン (AM) とその受容体について研究を行っています。アドレノメデュリン (AM) は多彩な作用を有するペプチドであり、その活性は受容体活性調節タンパク RAMP2、3により制御されます。本研究では膵癌肝転移における AM-RAMP2、3系の意義を検討しました。PAN02膵癌細胞を移植すると、血管特異的 RAMP2 ノックアウトマウス (DI-E-RAMP2^{-/-}) では肝転移が亢進し、ポドプラニン (PDPN) 陽性癌関連線維芽細胞 (CAF) が増加していました。逆に RAMP3 ノックアウトマウス (RAMP3^{-/-}) では転移が抑制され、PDPN 陽性 CAF は減少しました。線維芽細胞において RAMP3 をノックダウンさせると、PDPN の発現も低下しました。また、RAMP3^{-/-} 線維芽細胞では、PDPN 発現に関わる Src、Cas 活性が低下し、 α SMA 発現とストレスファイバーの形成が抑制されており、アレー解析では腫瘍増殖因子の発現低下と抑制因子の発現亢進が認められました。共培養系で、RAMP3^{-/-}CAF は PAN02 の増殖、遊走を抑制すると共に、PAN02 と混合して移植すると、肝転移は抑制されました。最後に、RAMP3^{-/-} に対して AM を持続投与し、AM-RAMP2 系を選択的に活性化したところ、癌転移は RAMP3^{-/-} よりもさらに抑制されました。

PDPN 陽性の CAF の存在と、癌の予後不良との相関が報告されています。RAMP3^{-/-} では悪性度の高い PDPN 陽性 CAF が減少した結果、癌転移が抑制されたと考えられました。選択的な RAMP2 活性化と RAMP3 阻害が癌転移抑制の新たな治療法になることが期待されます。

最後となりましたが、今回の受賞は新藤隆行教授をはじめ、信州大学循環病態学教室の先生方、先輩方のご指導とご支援の賜物と深く感謝しております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

Pathophysiological significance of AM-RAMP2, 3 systems in tumor metastasis



受賞者 - 3

藤原 隆行 先生 (東京大学大学院医学系研究科重症心不全治療開発講座 / 東京大学医学部附属病院循環器内科)

受賞演題

「新たな三次元的形態解析手法によって明らかとなった肺高血圧症の病態初期の微小血管リモデリングの意義」



略歴

2009年3月	東京大学医学部医学科卒業
2009年4月	茨城県立中央病院 初期臨床研修医
2010年4月	東京大学医学部附属病院 初期臨床研修医
2011年4月	自治医科大学附属さいたま医療センター 臨床助教
2018年4月	日本学術振興会 特別研究員
2018年3月	東京大学大学院医学系研究科 博士課程修了
2019年4月	東京大学大学院医学系研究科重症心不全治療開発講座 特任研究員

—— 研究内容および抱負 ——

このたびは名誉ある日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞に選考いただき誠にありがとうございます。選考委員の先生方ならびに関係者の方々に御礼申し上げます。

顕微鏡を用いた病理組織学的評価は、分子生物学が発達した今日においても重要な解析ツールとしての役割を担っていますが、その多くは切片による二次元的評価に留まっています。そのため、組織の三次元形態評価がその病態解明に重要である神経科学や血管生物学を中心とした分野では、三次元的形態を把握するツールの開発が求められています。

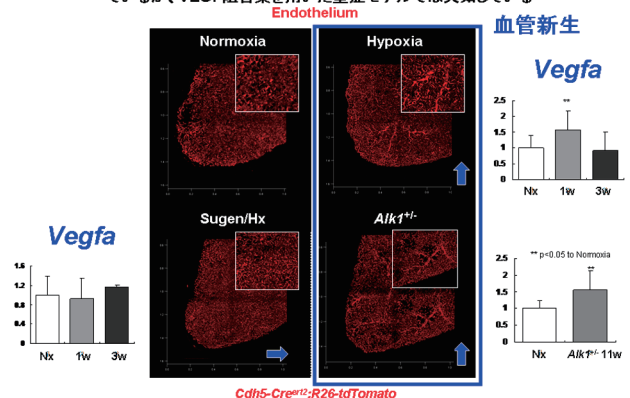
近年特に本邦での技術開発が目覚ましい組織透明化技術は、脱脂・脱色によりマウス全身および各種臓器を透明にし、臓器全体・全層での三次元構造解析を可能としています。本研究では組織透明化技術CUBICを各種臓器や抗体・蛍光レポータータンパクに応じて独自に改変し、心臓・肺の臓器全体全層での血管構造の三次元可視化に成功し、さらには肺高血圧症の病態解明・治療開発研究に応用しました。

肺高血圧症患者やモデル動物の肺実質では血管内皮増殖因子(VEGF)の発現が上昇していますが、当初VEGFの上昇は血管内皮細胞の異常増殖を促し、病態を悪化させると考えられていましたが、VEGF受容体阻害薬を用いたモデルでは肺高血圧症が悪化するなどの矛盾点があり、その意義については混沌としています。本研究では、軽症の肺高血圧症モデルマウスにおいて、VEGFの上昇は代償的な微小血管増生を促していることを三次元画像を用いて示し、またVEGFの上流に位置し、低酸素誘導因子HIFとは独立した血管新生因子であるPGC1- α がその制御に重要な役割を果たしていることを示しました。将来的には、ヒト病理組織においてもこの技術に応用し、実際の肺高血圧症検体での検討を進め、その治療応用につなげていきたいと考えています。

最後にこの場を借りて、ご指導いただいております東京大学循環器内科 小室一成先生、武田憲文先生、自治医科大学分子病態研究部 西村智先生に深く御礼申し上げます。

3次元形態解析システムによる血管内皮細胞の細胞系譜追跡実験

軽症肺高血圧症モデルではVEGFの発現上昇とともに微小血管新生が生じているが、VEGF阻害薬を用いた重症モデルでは欠如している



受賞者-4

森 健太郎 先生 (山梨大学医学部内科学講座第3教室)

受賞演題

「摂食調節シグナルを介した血管脆弱性と腹部大動脈瘤発症の分子機構」



略歴

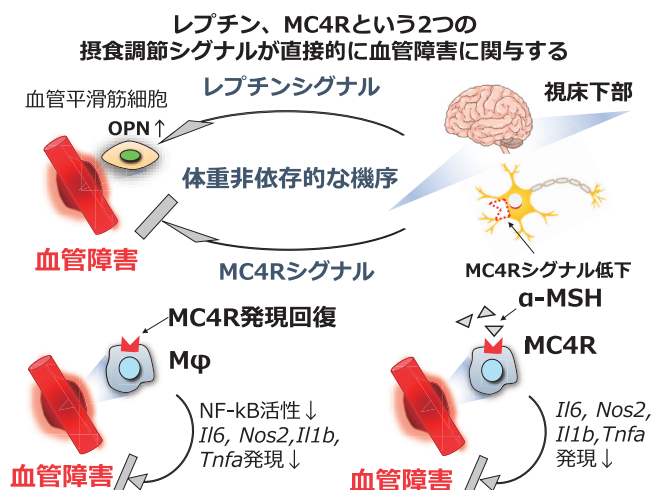
- | | |
|---------|--|
| 2012年3月 | 名古屋大学医学部卒業 |
| 2016年4月 | 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科博士課程
(分子内分泌代謝学分野) 入学 |
| 2017年4月 | 山梨大学大学院 総合研究部 医学域 博士課程 (内科学講座第3教室) 転入学 |

—— 研究内容および抱負 ——

この度は第23回日本心血管内分泌代謝学会学術総会におきまして、若手研究奨励賞という大変栄誉ある賞を賜りまして大変光栄に存じます。選考委員ならびに関係の諸先生方々に深く感謝申し上げます。

肥満に関連した血管障害発症の詳細な分子機構については未だ未解明であると存じます。近年、摂食調節シグナルの一つであるメラノコルチン4型受容体(MC4R)の活性低下が冠動脈疾患リスクと負の相関を示すことが報告され、我々はMC4Rシグナルの低下による血管障害発症の分子学的機序について研究を行いました。具体的には、これまで主に中枢神経系の神経細胞に発現し摂食調節に関与すると認識されていたMC4Rが単球やマクロファージにも発現していること、さらに骨髓系細胞特異的にMC4R発現を回復したマウスモデルを用いて直接的に血管障害保護的に作用していることを確認いたしました。また、2型糖尿病患者の末梢血を用いてヒト単球上に発現するMC4Rの発現量と動脈硬化の相関も検証することができました。この度の受賞を励みにし、更なる研究の発展に向けてますます努力していく所存です。

最後に、本研究においてご指導いただきました当教室の古屋文彦准教授、土屋恭一郎先生、九州大学の小川佳宏教授をはじめご指導ご協力賜りました先生方にはこの場をお借りして心より御礼申し上げます。



受賞者-5

森内 健史 先生 (京都大学大学院 医学研究科 循環器内科学)

受賞演題

「TRPC チャネル阻害薬の肺高血圧の新規治療薬としての可能性」



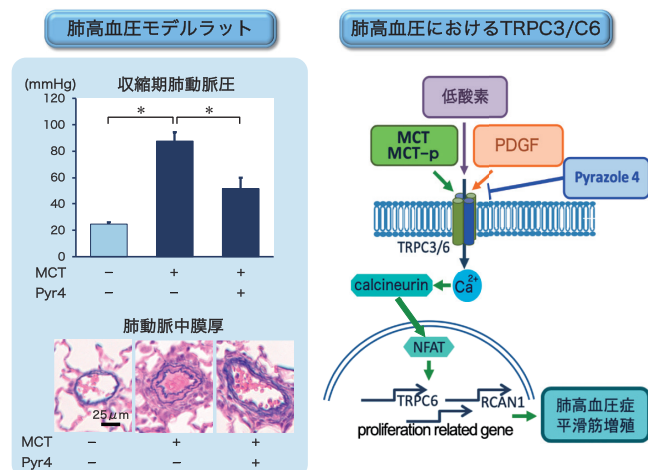
略歴

2011年 奈良県立医科大学医学部医学科卒業
2011年 京都大学医学部附属病院 研修医
2013年 国立循環器病研究センター 心臓血管内科部門 レジデント
2016年 現職

— 研究内容および抱負 —

我々の研究室ではこれまでに store operated Ca^{2+} channel の一種である Classic transient receptor potential channel 6 (TRPC6) と心不全との関連を研究しており、肥大心や ET-1 刺激、不全心において TRPC6 の発現が亢進し、TRPC6 は calcineurin-NFAT シグナルによる NFAT 核内移行を介して心臓の病的リモデリングに関与すること、そして TRPC6 が positive feedback 機構を形成することを示しました。近年、循環器領域において肺高血圧症が注目されており、肺高血圧症と TRPC3/C6 の関連も報告されてきております。しかし依然として TRPC3/C6 を標的とした治療薬は開発されておられません。そこで我々は動物モデルや肺高血圧症患者由来の肺動脈平滑筋細胞を用いて肺高血圧症における TRPC3/C6 の関与及び、TRPC3/C6 特異的阻害薬の効果について検討を進めることと致しました。これまでの評価で Monocrotaline pyrrol 誘発肺高血圧モデルや低酸素負荷モデルにおける肺高血圧症の程度が TRPC3/C6 のダブルノックアウトマウスでは WT マウスと比較して軽減することが分かりました。また、TRPC3/C6 の選択的阻害剤である pyrazole4 は、Monocrotaline 誘発肺高血圧モデルラットの肺高血圧症を抑制し、ヒト肺高血圧患者由来肺動脈平滑筋細胞における PDGF 投与時の細胞増殖亢進も抑制することが分かりました。以上の結果より TRPC3/C6 は肺高血圧症の新規治療ターゲットとなり得ることが示されました。

この度は第 23 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会におきまして若手研究奨励賞という栄えある賞をいただき誠にありがとうございます。今回このような賞を頂いたのも研究室の皆様を初め、京都大学循環器内科及び共同研究者の皆様のお力があってのものと実感しております。これを励みに、引き続き肺高血圧の治療標的としての TRPC3/C6 の意義を検討して参りたいと考えております。既に pyrazole4 よりも薬物動態に優れ、安全性、安定性の高い新規化合物も見出しており、共同研究グループと共に臨床応用に向けた準備も進めております。今後はこの新規化合物を肺高血圧症のみならず、TRPC3/C6 の関与が示されている心不全にも応用し、新たな治療標的としての検討も行えればと考えており、より一層の研究を進めて参ります。



日本心血管内分泌代謝学会役員名簿

■理事長

伊藤 裕 慶應義塾大学医学部腎臓内分泌代謝内科

■副理事長

吉村 道博 東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科

■理事

市原 淳弘 東京女子医科大学内分泌疾患総合医療センター高血圧・内分泌内科

小川 佳宏 九州大学大学院医学研究院病態制御内科学

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科分子細胞代謝学分野

柏原 直樹 川崎医科大学腎臓・高血圧内科

北村 和雄 宮崎大学医学部内科学講座循環体液制御学分野

栗原 裕基 東京大学大学院医学系研究科生化学分子生物学講座代謝生理化学分野

桑原 宏一郎 信州大学医学部循環器内科学教室

児島 将康 久留米大学分子生命科学研究所遺伝子情報研究部門

小室 一成 東京大学大学院医学系研究科循環器内科学

斎藤 能彦 奈良県立医科大学第一内科

下澤 達雄 国際医療福祉大学三田病院臨床検査科

新藤 隆行 信州大学大学院医学系研究科疾患予防医科学系専攻循環病態学講座

田村 功一 横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学

西山 成 香川大学医学部薬理学

深水 昭吉 筑波大学生存ダイナミクス研究センター

中川 修 国立循環器病研究センター研究所分子生理部

南野 徹 新潟大学大学院医歯学総合研究科循環器内科

益崎 裕章 琉球大学大学院医学研究科内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科)

向山 政志 熊本大学大学院生命科学研究部腎臓内科学

柳沢 正史 筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構(WPI-IIIIS)

樂木 宏実 大阪大学大学院医学系研究科老年・総合内科学

■監事

菅波 孝祥 名古屋大学環境医学研究所分子代謝医学分野

長瀬 美樹 杏林大学医学部解剖学教室(肉眼)

■幹事

岸 拓弥 国際医療福祉大学福岡保健医療学部

徳留 健 国立循環器病研究センター研究所生化学部

名越 智古 東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科

■名誉会員【34名】

荒川規矩男	稲上 正	稲田 満夫	井村 裕夫	岩尾 洋	江藤 胤尚	荻原 俊男
片山 茂裕	寒川 賢治	木之下正彦	齊藤 壽一	猿田 享男	島本 和明	鈴木 洋通
高橋 伯夫	竹田 亮祐	富田 公夫	永井 良三	中尾 一和	中川 雅夫	成瀬 光栄
名和田 新	平田結喜緒	藤田 敏郎	眞崎 知生	松尾 壽之	松岡 博昭	宮森 勇
村上 和雄	矢崎 義雄	泰江 弘文	吉永 馨	吉見 輝也	吉村 学	

■功勞評議員【81名】

安部 陽一	池本 文彦	石川 三衛	石田 均	石橋みゆき	伊藤 貞嘉	伊藤 宏
井上 達秀	今泉 勉	岩崎 泰正	岩本 安彦	内田 健三	梅村 敏	浦 信行
浦田 秀則	大磯ユタカ	岡村 富夫	小川 久雄	小野 美明	柏木 厚典	川口 秀明
河野 雄平	河邊 博史	河南 洋	菊池健次郎	木越 俊和	木曾 良明	木村 定雄
木村 時久	久代登志男	熊井 俊夫	河野 雅和	小島 至	後藤 淳郎	塩之入 洋
重富 秀一	瀬戸 信二	相馬 正義	高木耕一郎	高須 信行	高野加寿恵	高原 二郎
高柳 涼一	竹越 襄	田中 一成	千原 和夫	辻井 悟	蔦本 尚慶	東條 克能
戸恒 和人	中村 元行	成宮 周	西川 哲男	西村 和修	橋爪 潔志	橋本 隆男
檜垣 實男	平井 愛山	平田 恭信	廣江 道昭	広瀬 茂久	福井 清	藤原 久義
細谷 龍男	松浦 秀夫	松澤 佑次	水野 兼志	南野 直人	宮崎 滋	宮崎 瑞夫
村上 治	村木 篁	森井 成人	森瀬 敏夫	保嶋 実	山路 徹	山下 博
山本 格	家森 幸男	吉政 孝明	渡辺 毅			

■評議員【188名】

赤澤 宏	浅原 哲子	芦澤 直人	荒井 宏司	有馬 秀二	安藤 孝	飯利 太朗
池田 惠一	池田 康将	石上 友章	石川 義弘	石田 純治	泉 康雄	泉家 康宏
市原 淳弘	一色 政志	伊東 宏晃	伊藤 裕	井上 元	今城 俊浩	上田 陽一
臼井 健	海老原 健	大石 充	大谷健太郎	大津留 晶	尾形真規子	岡山 悟志
小川 佳宏	荻野 和秀	小倉彩世子	尾上 健児	笠原 正登	柏原 直樹	方波見卓行
勝田 秀紀	勝谷 友宏	加藤 丈司	神出 計	唐島 成宙	川上 利香	岸 拓弥
岸本 一郎	北見 裕	北村 和雄	北村健一郎	衣川 徹	日下部 徹	熊谷 裕生
倉林 正彦	栗原 裕基	桑原宏一郎	栗原 孝成	上月 正博	児島 将康	此下 忠志
小林 直彦	小松 弥郷	小室 一成	斎藤 能彦	酒井 寿郎	坂本 昌也	笹野 公伸
篠村 裕之	佐田 政隆	佐藤 敦久	佐藤 文俊	佐藤 稔	沢村 達也	七里 眞義
柴田 洋孝	島袋 充生	清水 逸平	下澤 達雄	下平 雅規	新藤 隆行	菅波 孝祥
菅原 明	菅原 照	杉本 研	杉山 徹	須田 道雄	曾根 正勝	園山 拓洋
染川 智	高橋 和広	高橋 克敏	高橋 貞夫	高橋 将文	鷹見 洋一	竹越 一博
武田 憲文	竹田 征治	武田 仁勇	田中 智洋	田辺 晶代	谷山 義明	種本 雅之
田村 功一	田村 尚久	土屋恭一郎	鶴田 敏博	寺田 典生	土居健太郎	東口 治弘
徳留 悟朗	徳留 健	富田奈留也	永江 徹也	中岡 隆志	中神 啓徳	中川 修
中川 眞代	中川 靖章	中里 雅光	長瀬 美樹	長田 太助	中谷 公彦	中西 道郎
中野 茂	中元 秀友	永谷 憲歳	中山 智祥	中山 雅文	名越 智古	錦見 俊雄
西村 眞人	西山 成	野出 孝一	萩原 啓実	長谷川浩二	長谷部直幸	浜中 一郎
林 晃一	林 登志雄	原田 昌樹	東浦 勝浩	久留 一郎	人見 浩史	廣岡 良隆
深水 昭吉	福田 昇	古橋 眞人	古本 智夫	細田 公則	堀尾 武史	本間康一郎
前島 洋平	榎野 久士	益崎 裕章	榊田 出	三浦伸一郎	水野 雄二	光山 勝慶
南野 徹	宮内 卓	宮崎 均	宮里 幹也	宮下 和季	宮田 篤郎	宮本 惠宏
向山 政志	宗 友厚	茂木 正樹	森 潔	森 建文	森 泰清	森崎 隆幸
森下 竜一	森本 聡	八十田明宏	柳沢 正史	山下 潤	山田 敬行	山原 研一
山本 啓二	山本 浩一	山本 繁樹	横井 秀基	吉賀 正亨	吉田 英昭	吉田 陽子
吉林 宗夫	吉村 道博	吉本 貴宣	米田 隆	樂木 宏実	脇野 修	

■2019年度新入会会員【43名】

伊藤 孝史	魏 陽璇	宇都 飛鳥	浦崎 明宏	小川 治夫	糟野 健司	神吉 智子
木戸口 慧	城所 研吾	金口 翔	候 聡志	小杉 智規	児玉 豪	近藤 恵
七條 聖	清水 美保	鈴木 徹	関 康史	染谷 将太	田中 翔平	田中 正明
張 波	對馬 英雄	遠山 直志	錦戸 利幸	西口 佳彦	長谷川 頌	早崎 貴洋
原 文香	原 雅俊	平橋 淳一	藤枝久美子	藤原 隆行	舟本 智章	古市 賢吾
細田 洋司	松尾 康平	宮川 太郎	室町 直人	森内 健史	森永 潤	山村 智
和田 佳久						

第 23 回 日本心血管内分泌代謝学会 評議員・総会 議事録

- 日 時 : 2019 年 12 月 15 日 (日) 11 : 40~12 : 10
- 場 所 : 神戸国際会議場 5F 501 号室
- 評議員数 : 192 名
- 正会員数 : 617 名
- 議 題 :
- 第 1 号議案 役員選任の件
- 第 2 号議案 次期理事長・副理事長選任の件
- 第 3 号議案 名誉会員・功労評議員の件
- 第 4 号議案 評議員の件
- (1) 新評議員について
- (2) 再任評議員について
- (3) 評議員資格審査委員選任について
- 第 5 号議案 長期会費未納会員の件
- 第 6 号議案 学術総会会長の件
- (1) 第 26 回 (2022 年度) 学術総会会長の件
- 第 7 号議案 平成 30 年度 (2018 年度) 会計報告の件
- (1) 平成 30 年度 (2018 年度) 一般会計
- (2) 第 22 回 (2018 年度) 学術総会会計
- (3) 事務経費追加負担の件
- (4) 会員管理システム保守費用追加負担の件
- 第 8 号議案 研究賞の件
- (1) 高峰讓吉賞・高峰讓吉研究奨励賞・永井良三賞の件
- (2) 高峰讓吉賞・高峰讓吉研究奨励賞・中尾賞／永井賞選考委員の選任について
- (3) 2020 年度若手研究奨励賞選考委員の選任について
- 第 9 号議案 学術総会準備状況の報告
- 第 24 回 (2020 年度) 学術総会
- 第 25 回 (2021 年度) 学術総会
- 第 10 号議案 会員数の現状報告
- 第 11 号議案 その他
- (1) 会員連絡号の件
- (2) 日本心血管内分泌代謝学会ホームページの件

評議員会・総会の開催にあたり北村和雄理事長から出席人数の確認があり、定款第 21 条及び定款第 26 条の定足数(評議員会 128 名、総会 206 名)を満たす出席者(評議員会 128 名、総会 258 名、委任状を含む)があることから、本評議員会・総会は成立する旨報告があった。次いで、定款第 20 条第 2 項及び第 24 条「議長は年次会長が担当する」に基づき柏原直樹会長を議長に指名し、承認を得た。以下、柏原議長により議事が行なわれた。

第1号議案 役員選任の件

北村理事長から、今年度総会で年齢規定により任期満了退任となる理事は伊藤貞嘉、南野直人の各理事であることが報告された。なお、4年の任期を満了する理事は伊藤 裕(慶應義塾大学 医学部 腎臓内分泌代謝内科)、吉村道博(東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科)と報告され、いずれも再任されることが承認された。

北村理事長から、新理事や新監事の候補者はいないと報告された。北村理事長から、第24回学術総会会長付幹事候補として名越智古(東京慈恵会医科大学 循環器内科)会員が理事会で承認されていると提案され、承認された。

第2号議案 次期理事長・副理事長選任の件

北村理事長から、理事長が今年度の総会で2期目2年の任期満了となる旨報告された。次期理事長として伊藤 裕副理事長が、次期副理事長として吉村道博会計担当理事が5月理事会で推薦されていると提案され、承認された。

第3号議案 名誉会員・功労評議員の件

北村理事長から、名誉会員候補者として永井良三、成瀬光栄の各功労評議員を提案され、それぞれ承認された。

次に、功労評議員候補者として井上達秀(静岡県立総合病院 糖尿病・内分泌代謝センター)、岩崎泰正(高知大学 教育研究部 医療学系 臨床医学部門)、浦田秀則(福岡大学 筑紫病院 循環器内科)、熊井俊夫(聖マリアンナ医科大学 大学院 遺伝子多型・機能解析学)、森瀬敏夫(森瀬クリニック)の5名の各評議員が推薦され、それぞれ承認された。

第4号議案 評議員の件

(1) 新評議員について

向山評議員資格審査委員長から、令和元年度新評議員として候補者4名が資格条件を充たし、理事会でも承認されているので推薦したいとの提案がなされ、承認された。

令和元年度新評議員候補者(任期:2019年総会～2023年総会)は以下の通り:名越智古、小倉彩世子、下平雅規、日下部徹の各氏。

(2) 再任評議員について

向山評議員資格審査委員長から、4年の任期を満了する任期満了評議員として、以下の22名の再任が提案され、承認された。

赤澤 宏、有馬秀二、市原淳弘、加藤丈司、川上利香、栗原孝成、小林直彦、園山拓洋、高橋和広、高橋克敏、武田仁勇、中川靖章、長瀬美樹、中西道郎、中野 茂、中山智祥、萩原啓実、東浦勝浩、藤井 聡、槇野久士、益崎裕章、森本 聡の各評議員。

(3) 評議員資格審査委員選任について

北村理事長から、現在の評議員資格審査委員(向山政志委員長、岸本一郎委員、西山 成委員)の任期満了(2年間)に伴い、いずれも再任されることが報告された。

第5号議案 長期会費未納会員の件

北村理事長から、2014年から2015年までの会費未納者13名（一般会員12名、評議員1名）については、前年度末（平成30年3月末）までに会費を納入いただけなかったため自動的に退会処理したことが報告された。今後も3年以上会費未納者で会費納入にご賛同いただけない場合は自動的に退会処理することが理事会で承認されている旨報告された。

第6号議案 学術総会会長の件

(1) 第26回（2022年度）学術総会会長の件

北村理事長から第26回（2022年度）学術総会会長に向山政志理事（熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学）を推薦したいとの提案があり、承認された。

第7号議案 平成30年度（2018年度）会計報告の件

(1) 平成30年度（2018年度）一般会計

吉村道博会計理事より、平成30年度の一般会計について、前期繰越金19,128,285円、会費収入2,058,000円、受取利息127円、高峰賞寄附金1,000,000円、中尾賞／永井賞寄付金200,000円、学術総会会計繰入金575,613円、収入合計22,962,025円、当期収入は3,833,740円、支出は印刷費532,116円、通信運搬費138,630円、人件費500,000円、旅費交通費420円、CVEM表彰費（副賞）500,000円、表彰費（記念品代）2,120円、高峰賞関連費604,554円、永井賞関連費100,000円、事務局家賃250,000円等、支出合計2,781,817円、当期収支差額1,051,923円、次期繰越収支差額20,180,208円であるとの報告がなされた。

(2) 第22回（2018年度）学術総会会計

第22回日本心血管内分泌代謝学会学術総会について、伊藤 裕会長に代わり北村理事長から、2018年4月28日～29日、宮崎のフェニックス・シーガイア・リゾートで第91回日本内分泌学会学術総会との合同開催で、414名の参加者がありCVEM単独で126題、内分泌学会との合同演題と合わせて191題であった。学術総会の収支は、収入が11,738,821円、支出は11,162,350円で納税充当引当金576,477円は学術総会会計繰入金口座に入金されたとの報告があった。

長瀬監事から、菅波監事とともに行った監査の結果、一般会計報告および学術総会の会計処理は適正に行われている旨報告され、承認された。

(3) 事務経費追加負担の件

北村理事長から、CVEMの事務経費については親学会の日本内分泌学会から応分の経費負担を求められており理事会で審議した結果、追加経費約50万を負担すること、また、その結果、収支決算が継続して大幅な赤字となるので、経費削減策として、会員連絡号を冊子体からホームページ掲載の電子媒体とすること、日本内分泌学会学術総会時に開催している理事会（4月）をCVEM学術総会時開催（12月）の年1回とすること、4月理事会開催時に開催している高峰謙吉賞等選考委員会はスカイプ等を利用した電子会議とすること等が提案され、承認された。

(4) 会員管理システム保守費用追加負担の件

北村理事長から、日本内分泌学会の会員管理システムが新システムへ移行したことに伴い、従来の会員管理システムを継続使用している分科会に会員数に応じた保守費用分担(年間約10万円)の依頼があり、理事会で検討した結果、会員管理に必須なシステムのためやむを得ない経費と考えられるため追加負担することが提案され、承認された。

第8号議案 研究賞の件

(1) 高峰讓吉賞・高峰讓吉研究奨励賞・永井良三賞の件

北村和雄選考委員長より厳正な審査の結果、第23回高峰讓吉賞に柏原直樹教授(川崎医科大学 腎臓・高血圧内科)を、また、第23回高峰讓吉研究奨励賞に栗原孝成講師(熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学)、中野大介准教授(香川大学 医学部 薬理学)を、また、第2回永井良三賞に野村征太郎特任助教(東京大学 医学部附属病院 循環器内科)を5月理事会で選定したと報告された。

YIA 審査状況について柏原直樹選考委員長より報告があった。13名の応募者があり、一次審査で11名を選考し、14日9時からの口演で審査を行い選考委員会で以下の5名を選定したと報告された。

YIA 受賞者: 候 聡志(東京大学 医学部附属病院 循環器内科)、戴 昆(信州大学 医学部 循環病態学教室)、藤原隆行(東京大学 大学院医学系研究科 重症心不全治療開発講座)、森健太郎(山梨大学 医学部 第三内科)、森内健史(京都大学 大学院医学研究科 循環器内科学)

(2) 高峰讓吉賞・高峰讓吉研究奨励賞・中尾賞／永井賞選考委員の選任について

北村理事長から、令和2年度(2020年度)高峰讓吉賞・高峰讓吉研究奨励賞の選考委員について報告された。選考委員長は伊藤 裕次期理事長、年次会長は吉村道博第24回学術総会会長、継続委員として市原淳弘理事、斎藤能彦理事、柳沢正史理事。新委員(任期:2019年12月総会～2021年総会まで)は以下の通り。小室一成理事(東京大学 大学院医学系研究科 循環器内科学)、中川 修理事(国立循環器病研究センター 研究所 分子生理部)、樂木宏実理事(大阪大学 大学院医学系研究科 老年・総合内科学)。

(3) 2020年度若手研究奨励賞選考委員の選任について

北村理事長から、令和2年度(2020年度)若手研究奨励賞選考委員について報告された。委員長は吉村道博第24回学術総会会長。委員は、継続委員として田中智洋(名古屋市立大学 大学院医学研究科 消化器・代謝内科学)、永田さやか(宮崎大学 医学部 内科学講座 循環体液制御学分野)、東邦康智(マサチューセッツ工科大学 生体工学科)の各委員。新委員(任期:2019年12月総会～2021年総会まで)は武田憲文(東京大学 医学部附属病院 循環器内科)、土屋恭一郎(山梨大学 医学部 内科学講座 第三教室)、長谷川一宏(慶應義塾大学 医学部 腎臓内分泌代謝内科)の各委員。

第9号議案 学術総会準備状況の報告

第24回(2020年度)学術総会

第24回(2020年度)学術総会について吉村道博会長から2020年の12月11日(金)～12日(土)に東京の浜松町コンベンションホールで日本血管生物医学会、国際心臓研究学会日本部会(ISHR)、国際応用血管生物医学会(ISACB)との4学会合同で開催する予定、海外から100名ほどの参加をみこんでおり国際色を打ち出した学会にしたい旨報告された。

第 25 回 (2021 年度) 学術総会

第 25 回 (2021 年度) 学術総会について児島将康会長から 2021 年の 12 月 10 日(金)～11 日(土)に久留米シティープラザ(福岡県久留米市)で日本血管生物医学会、国際心臓研究学会日本部会 (ISHR)、高血圧疾患モデル学会、心筋生検研究会の 5 学会合同開催を計画していると報告された。

第 10 号議案 会員数の報告

桑原理事より 2019 年 9 月 25 日現在で 725 名の会員で 4 月 1 日の 710 名に比べ若干増加していると報告された。

第 11 号議案 その他

(1) 会員誌発行の件

北村理事長から、第 7 号議案(3) 事務経費追加負担の件で述べたように、追加事務経費負担に伴う CVEM の収支バランスの悪化を抑える施策として、会員連絡号を冊子体からホームページ掲載による電子媒体とする旨報告された。

(2) 日本心血管内分泌代謝学会 ホームページの件

北村理事長より日本心血管内分泌代謝学会のホームページをご利用いただきたい。また、ご意見等事務局までお寄せいただきたいとの要望があった。

最後に第 23 回 (2019 年度) 学術総会の柏原会長から、12 月 14 日から 15 日まで神戸国際会議場で日本血管生物医学会と国際心臓研究学会日本部会と 3 学会合同で開催している旨、また、一般演題 90 題、合同シンポジウム、各学会ごとのシンポジウム、各受賞講演等を行い、約 400 名程度の参加者である旨報告された。以上、すべての審議が終了したので、柏原直樹議長が評議員会・総会の閉会を宣言した (12:10)。

2019 年 12 月 15 日

第 23 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会にて